
我々共が夢の跡

ハチエツト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我々共が夢の跡

【Nコード】

N3879Z

【作者名】

ハチエツト

【あらすじ】

辺境の貧しき国、ヘイムズを踏みつけ空を貫く巨大な影。

誰とはなしに人々はその影を魔王と呼んだ。

魔王来訪から三年後、ある者はいずこかへ消えたヘイムズの民の残した財宝を狙い、ある者は栄光を求め、ある者は失った者を再び手に入れるため、ある者は力を求め、ある者は正義のため、ある者は何者かに導かれ、再びその地に人が集う。

しかしその地は既に人類のモノではなかった。

泥の雨に打たれ、吹き荒ぶ風に吹かれ、険しい山々を超え、魔に

飲み込まれ、一つまた一つと命の代償は払われる。

それでも人々の歩みは止まらない。

魔王来訪の地、魔都ヘイムズを巡るダークファンタジー。

魔都ヘイムズ

人の子よ何故。

「おい、なにか言ったか？」

至近距離にも関わらず、耳を劈くような雨音に負けじと大声でガラクシーが叫んだ。

「僕はなにも。だけど学者先生、ここじゃ誰も何も言っていないくても人の声が聞こえるなんてしょっちゅうだ。で、そういう時は隠れてやり過ごすのが一番なんだ」

「休憩はさつきしたばかりだろう！」

「僕の指示に従え先生。少し戻れば教会があつたな、そこまで戻ろう」

「五歩進むたびに四歩戻らなきゃいかんのか？ これじゃいつまで経っても目的地に付かんぞ」

「今日は特別だ。さつきから何かが妙に、畜生め、騒がしい。まるで蜂の巣を突いたみたいだ」

言葉で説明出来ない、暗澹たる不安がブツチャーの胸中に去来する。具体的に、どう危険なのか、なにがおかしいのか、口に出せないのがもどかしい。

それはたとえば、数メートル先の景色の色が、わずかに赤みがかつているように見えるとか、雨音が僅かに耳に重く残るだとか、足を跳ねる泥がいつもよりも高く飛んでいる気がするだとか、そういった些細な他愛のない違和感の集合体だった。一つなら良いが、それがいくつもあると、予想もつかない良くないことが起こる気がする。

笑ってしまうほど漠然とした不安感だが、それを無視するわけにはいかなかった。

「先生、今日はダメだ」

「ダメ？ くそ！ 私は君に、確かに報酬を払ったよな？ きつかり、銀貨三枚！」

「僕があなたに頼まれたのは、貴方を安全に『裏ドアの砦』に案内することだ。そして今強行すると、永遠に辿り着かない可能性がある」

ガラクシーは不満げに唸り、やがて渋々と言った調子で言う。

「倍の報酬を払ってもいいぞ」

「ダメなものはダメだ。僕を信用してほしい。報酬は最初に交わした契約のもので十分だ」

一度頑なに口に出してみると、不安感はずすまます確信めいてきた。逃げなければならぬ、それも、可能な限り早く。

「逃げ先生。引き返すぞ」

「まったく、ままならんな」

ガラクシーは不満を口にしながらも、結局はブツチャーに従った。

来た道を引き返し、僅か五分の出来事だった。一寸先の視界を覆わんばかりの雨に紛れ、それはやってきた。

「止まれ、誰だ」

前方に人影。ブツチャーは即座に手斧を抜き、後に続くガラクシーを手で制した。

輪郭以上のものが見えないのは雨の所為かと思ったが、そうではなかった。それは確かに人影だった。

人影以上のものではなかった。

縁だ。

雨の中に人間の形をした輪郭を認識出来る。それは決して、現実の眼で見えているものではなかった。縁なのだ。そこに人間の形をしたものがある、ということだけはハッキリと判るのだが、音もなければ、匂いもない。形すら、実際には見えない。

「畜生め。そんな馬鹿な」

ふと意識を向ければ、その影は既に無数にあった。囲まれている

くは、不思議とそれを悟った。

それどころか、幻影の中にいると、もっと多くのものが見えるような気さえする。そしてそれを不幸にも実行に移した人間は、例外なく狂い軋み倒れていった。

雨が途端に重くなり、足が空回り始めた。全速力で走っているにも関わらず、汚泥に腰まで浸っているかのような感覚だ。

悪夢に追われているかのようなようだ。実際、このもどかしさも、現実味のなさもそれに近い。

まっすぐに走っているのか、それすらも疑わしい。

（畜生め。なぜ今起こる？ 以前はつい一週間前だぞ？ 教会はどこだ？ 建物に入らなければ、間に合うのか？ 先生！ 先生さんは付いてきてるのか？）

「ブツチャー……待て、待ってくれ……足が」

と、後方からか細い声。

「おかしいんだ……足がなくなっている気がする……」

ガラクシーが走るのを止め、座り込んだ。

「人が沢山いる。祭りだとみんな言っている……音楽が聴こえる……聞いたことがあるな……ああ、そうだ、実は私は、以前……若いころだが、ここに来たことがあるんだ。祭りに参加したんだ。この曲は、ヘイムズの民が好んで、伝統的にだが……弾いたり聴いたりする曲だ。祭りの時はよく流れてる……」

ガラクシーの声は、ほとんどどうわごとだった。眼は中空を漂っていて、走ることをすっかり忘れている。

「立て先生！ 置いていくぞ！」

「そうだ、思えば妻と会ったのは、その祭りだった。馴れ初めなんてすっかり忘れていた……十年に一度の大きなお祭りだったらしい結局、なにを祝っているのか、誰も知らなかったが、街中に酒が入っていて……子供もな、その日だけは、飲んでいいらしい」

ブツチャーはそれ以上耳を貸さなかった。先生すまない、とだけ小さく呟き、正面に向き直る。出会った三日程度の間柄だったが、

それでも彼のことは気に入っていた。好んで見捨てたいというわけではないし、もっと致命的な場面じゃなければ、多少なら命の危険だっておかしてもよかった。

だからと言つて、無駄死にはごめんだつた。

（貴方は助からないだろう。あとほんの少し状況がマシだったら……きつとあなたをひきずつて歩いていた）

今はもう先に進むしかなかった。既に、ブツチャーの耳にも喧騒が僅かに聞こえ始めている。

（あとほんの少しマシな状況？ なにを言い訳しているんだ、僕は。誰も聞いちゃいないつてのに！）

高慢なプライドがチクチクと痛む。それでもきつと助けていた、きつと助けていた、と心の中で何度も呟くが、その内は自分自身では覗き込めなかった。

（行かないと、誰にもどうにも出来なかった。誰にも……）

その時、雨間にそれは見えた。十字架だ。こちらを見張るかのよくな様子で、高々と、堂々たる姿で。

（教会……こんなに近づいてたのか……）

距離にして、五十メートルはないだろう。が、今や身体に押し掛かるものは重い雨だけではなかった。後方ではガラクシーが突っ伏している。

（出来るだろうか。彼を拾つて、教会まで……歩むことが、僕に）無理だ。と残酷な声がする。

実際に、ブツチャーの身体と精神は限界だつた。喧騒と、ついには音楽までもがその耳に聞こえてきた。もう戻れない。いや、あと五十メートル歩くのさえ怪しいんだ。と、ブツチャーは声に出したかった。

（いったいそれを誰に聞かせたいんだ、僕は）

済んで、口に出すのだけは堪えた。が、それは身体の中で暴発した。もう戻れない。五十メートルをたった一人で歩くのだって難しい。助けることなど出来はしない。

膝を付き、喘ぐ。息が苦しい。喉を裂けばきつと呼吸が楽になると忠告にも似た声が聞こえた気がして、実際に喉に手を掛けるが、ぎりぎり抵抗した。

誰も助けることなど出来はしない。誰も、誰かを、助けることなど。

人には限界がある。肉体の限界もそうだが、きっと良心の限界だろう。

(見てきたはずだ。ブッチャー。お前が、それを必要とした時に、誰もそれを与えなかったように)

その、自分自身の説得にも似た考えが頭を過った時、ようやくブッチャーの頭の霧が晴れた。歯を食いしばり、再び立ち上がる。

「僕はブッチャーじゃないぞ馬鹿めが！」

そう、心の内に語りかけてくる魔王に向かって叫び、ガラクシーの元へと走った。

魔都ヘイムズ（後書き）

始めまして。ファンタジー初挑戦になります。
どしどし意見、質問、改善点等、なんでもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879z/>

我々共が夢の跡

2011年12月13日02時06分発行